



《新会員のひと言》

新入会のご挨拶

大賀 美紀子

夫退職後の旅は、ヨーロッパの端を訪ねることから始まりました。スペイン・ポルトガル、スコットランド、はたまたトルコ…。端で起きたことは何だったのだろう。そしていつも心の中で気になる存在はポーランド。難しい文字や発音の国…縁あって当協会栗原成郎ご夫妻とワルシャワ在住ジャーナリスト松本照男ご夫妻のアレンジでポーランドを訪ねる旅に参加することが出来ました。安藤むつみさんとも一緒でした。2008年1回目はワルシャワから南東部ルブリン、ザモシチ、チェンストホヴァそしてクラクフ、アウシュビッツ、2回目2012年はワルシャワから始まって北西部のトルン、グニェズノ、ポズナン、ヴロツワフ、シドニツアなど。その歴史に緊張を覚えつつも、食べ物飲み物のおいしさにも感動。ハンザ同盟の街トルンの川向うに浮かび上がる姿はその後何度も夢に登場するほど。同じハンザ都市リュベックやハンブルクを訪ねる旅につながりました。シヨパンの背景にも心打たれます。

そんな私、長くフリーで講演会やコンサート、映画等に参加して来ましたが、4月から会員にさせていただき、11月の総会と楽しい持ち寄りパーティにも出席して、札幌にはこんなにもポーランドの方々沢山活躍されている、そして多彩な方々が会員でいらっしやると知り驚きました。会の終盤疲れて思わず椅子に座り一緒に歌っているうちにやがて国歌斉唱。歌詞を目で追うのが精いっぱい気が付いた時には皆さん立っていらした。なんと恥ずかしい、申し訳なさで一杯でした。と同時に、「ナポレオンのひそみに倣って」とある歌詞に、東欧の各地



ケイタイに電話が入った。小樽の友人、長屋の子さんからの急用であった。「あのね、斉藤征義さんが亡くなったの、それでねチヨマロさんがポーランド協会の“午後のポエジア”に誘って下さり親しかったんだから、どうかPOLEへ追悼文を書いて下さらない。」

葬儀の始まる15分前に、会場へ入った。奥さんは私の顔を見てニコニコして言った。「あれだけ元気だった人が、今日は何も喋らないのヨ…」何かホ

が様々な国との確執に置かれてきた歴史を思い出し、学びの機会をいただいたことを心より感謝しております。どうぞよろしくお願ひします。

(おおが・みきこ)

ポーランドという遠い国

嵩 文彦



子供のときから、偉人がたくさん出ている国であることは知っておりました。コペルニクス、シヨパン、キュリー夫人。キュリー夫人はしっかりと映画で見た覚えがあります。夫が馬車にはねられて亡くなる場面がありました。それからエスペラントのザメンホフ。文学に関わるようになってから、この国の苛酷な歴史と、それにもめげず文化をととても大切にす人びとの築いた国であることを知りました。

知人に誘われて、去年と今年続けて二回、「午後のポエジア」に参加しました。楽しくて意義あるイベントでした。その後、協会主催の「プロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念講演と朗読の集い〜ポーランド、サハリン、北海道〜」で感銘を受け、さらに二次会にも参加させていただきました。みなさんが文化を身近なものとして、分け隔てない人とのつながりとともに大切にされているのを感じ取り、すぐさま仲間に入れていただくことにいたしました。

昨年の春、文学のことで敦賀を訪れたとき、一月蜂起(1863-64)でシベリア流刑に処せられたポーランド人の孤児たちの本国送還の受け入れ港だったのを知りました。

ポーランドは大国ロシアに虐げられ続けました。反抗精神は人間にとって大切です。私は一度もポーランドを訪れることなく生涯を終えるでしょうが、ずっと憧れの国、懐かしい国であることでしょう。

(だけ・ふみひこ)

風花や君のゑまひと仰ぐ天

霜田 千代麿

一ツとした様子だった。弔辞で沢山の功績が語られた。イオネスコ作『瀕死の王様』の一行のセリフと同じ様に聴こえた。「全ては、過去となる」合掌

《例会》2016年6月4日〈朗読〉草野心平『第百階級』より。2017年5月27日、詩劇『ピウスツキ〜ポーランド・サハリン 愛と死』演出。2018年5月26日『もう一人の宮沢賢治』——この時の彼の朗読は〈すさまじく〉〈ソウゼツ〉の一語につきるものであった。

(しもだ・ちよまろ 2019.1.11、写真 五十嵐いおり)